

函館俘虜収容所建物のその後

第2次世界大戦の終戦が間近に迫っていた昭和20年（1945年）6月、旧日本軍による連合軍捕虜を収容する施設の一つである「函館俘虜（ふりょ）収容所」が函館から空知の炭鉱町に移転した。

美唄には本所が、芦別、赤平、歌志内にはそれぞれ分所が置かれた。

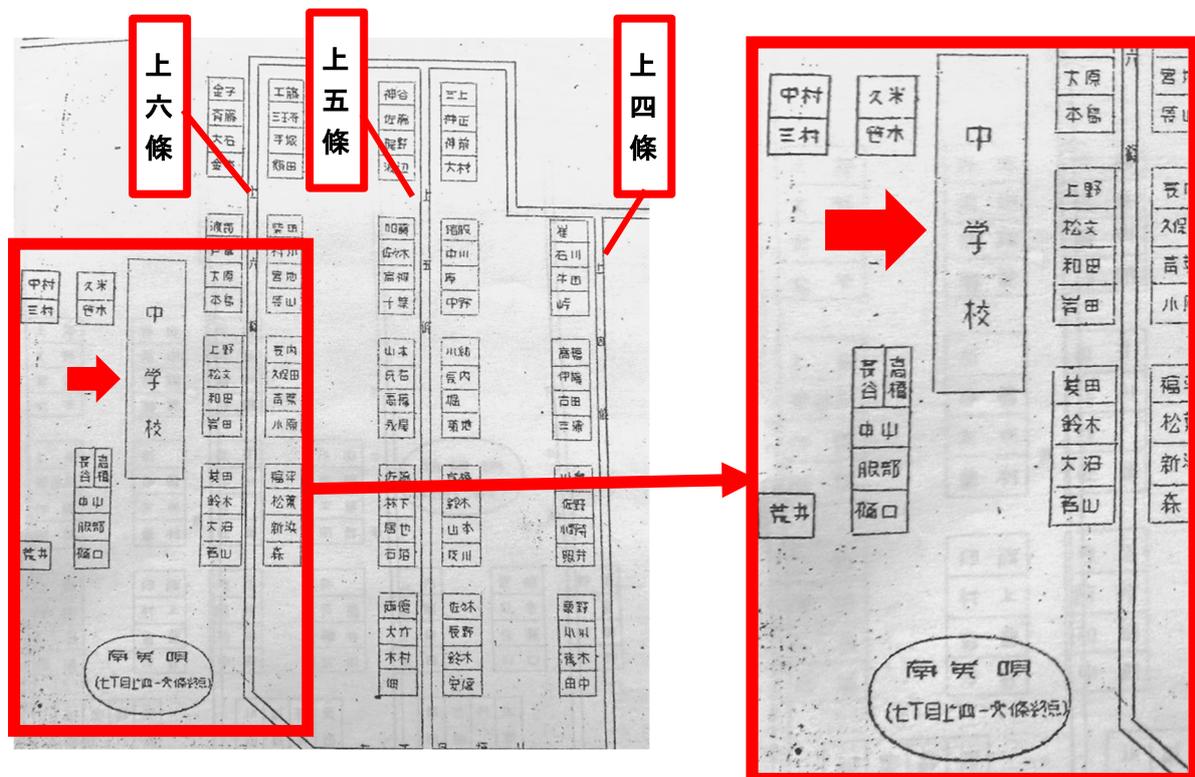
美唄に置かれた本所の場所は、三井美唄炭鉱の高台（当時の住所は、北海道空知郡美唄町2695-1（通称名では三井又は南美唄上7条7丁目）で、現在は自衛隊用地の一部となっている。終戦後、新制三井美唄中学校の仮校舎として使用されたが、その後、火災で焼失した¹とされている。

中学校の仮校舎として使用されていた期間は、昭和23（1948年）年4月1日から新校舎が完成した昭和25年（1950年）12月頃までと思われる²。

昭和25年7月発行の住宅地図「卓上案内」を見ると、「中学校」と表示された建物が、南美唄上7条7丁目付近にある。これが三井美唄中学校の仮校舎だったと思われる。地図の左・東側は高台、右・西側は国道12号に向かって、ゆるやかな下り勾配になっていて、多数の炭鉱住宅が並んでいた。中学校の周辺にも、炭鉱住宅と思われる建物が見られる。

移転した函館俘虜収容所本所があったのは、このあたりだったのではないだろうか。

昭和25年発行の住宅地図



収容所の建物は、派遣労務先である三井炭山美唄炭業所が「急きょ炭鉱南側の山麓に板囲いした宿舎を急造」³したものだが、元独身寮が使われ、内部改築は別として新たに建てたの

は板囲いくらいだったようだ⁴。

收容されていた捕虜の人数は 396 人で、国籍別ではイギリス 283 人、アメリカ 50 人、オランダ 53 人、オーストラリア 8 人、エストニア 1 人、カナダ 1 人。芦別、赤平、歌志内の各分所を合わせると合計 1,597 人。

收容所の様子を伝える記録は、ほとんど残っていないが、元三井美唄炭鉱病院医師、浅沼英一氏は、『美唄市医師会史』収録の「回想の美唄收容所」で次のように述懐している⁵。

「(前略) 主題の收容所であるが、二つあった。一つは白人の連合軍收容所、三井 8 丁目(ママ)の丘の上にあった。この收容所の中は、私は見ていない。この時、軍医として診療を担当していたのが、前三井芦別病院長の岡村先生の若き日であった。

後日、お聞きした話では、俘虜の日課、食事等は、日本の軍隊のそれと同じであったという。クリスマスには、彼等のやり方を認めたという。」

雑誌「歴史街道」⁶に連載された北条良平氏による函館俘虜收容所本所に收容されていたイギリス人作家に取材したレポート「オズワルド・ワインド氏の「ニッポン」」の中で、ワインド氏と美唄の農家の女性との出会いが記されている。その女性、松岡マツエさんは、当時、夫が出征し、3人の幼い子どもと家庭を守っていた。親戚からの勧めにより、軍の監視の下で、捕虜に畑を貸したという。畑に植えた大根は、終戦とともに不要となり、松岡さんに残された。松岡さんは、大根を薪と交換したおかげで、その冬を越せたという。ワインド氏は、松岡さんから卵とミルクを病気になった捕虜にと、もらったことを記憶していたが、松岡さんにはその記憶はないという。しかし、心が触れ合う交流があったのだろう。ワインド氏は終戦により美唄を離れる際に松岡さんに別れの挨拶に行ったという。

このエピソードは、松岡さんの地元である進徳町の開基 100 年記念誌『拓恵』(平成 3 年発行)に収録されている。ここでは「松岡さん」は「松川さん」になっている。

中学校の仮校舎に関しては、元教諭の志賀運蔵氏が三井美唄中学校創立 25 周年記念誌への寄稿「創立前後を追憶して」の中に旧俘虜收容所を仮校舎とした経過や建物の様子を伝えている⁴。

「(昭和 22 年 6 月 1 日、三井鉱山美唄鉱業所の寮を仮校舎として開校したとき=筆者注) 寮の仮校舎から第二の仮校舎として移転(昭和二十三年四月頃)したのが上七条七丁目にあった俘虜收容所(戦争中使用された建物)である。現在は夏草の茂みにその跡すら見いだすことができないが現在のスキー場の南方にあたる。この建物も前の仮校舎同様、校舎としては粗末なものであった。私は約一年半位この仮校舎で過ごしたように記憶しているが、印象に残っていることは、窓が少なく天井が低く、教室によっては真中に 2、3本の柱があったと(ママ)、雨漏りがひどく廊下の床が弾力的でせまかったことなどである。

こんな状態であるから、雨降りの時は大騒ぎ、机、椅子の異動(ママ)、バケツは総動員、大雨となるとかさをさして授業といった笑話の種になることが珍らしくなかった。従って曇天や雨天時には暗くて本が読めない、板書が見えないといった生徒からの不満の声にあけくれたのである。勿論クラブ活動など点々とある会社用のグラウンド、コートを借用してなんとか間に合わせた次第。」

三井美唄中学校は、昭和 24 年 9 月に新校舎の第一期工事の 8 教室が完成し、3年生のみが移転。第二期工事が昭和 24 年 11 月に完成、第三期工事が翌年 2 月に完成、12 月に最終工事となる第四期工事が完成し、昭和 26 年 3 月に新校舎の竣工落成式が行われているので、仮校舎から新校舎に 1、2 年生を含め学校全体の移転が完了したのは落成式以前と思われるが、昭

和 25 年 7 月発行の住宅地図には「中学校」の表示が残っていることから、火災で建物が焼失したのは、昭和 25 年 7 月以後、若しくは早くてもその数か月前あたりではないかと考えられる。美唄市消防本部には、昭和 25 年以降の火災記録が残されているが、この火災に触れているものはなく、焼失の正確な時期を確認することはできなかった。

美唄市総務部総務課行政資料室 伊藤 敦史

(令和 5 年 2 月 22 日)

注

- 1 『美唄市百年史』平成 3 年発行。807 頁。
- 2 三井美唄中学校の沿革（創立 25 周年記念誌『さゆらぎ』）によると、同校の校舎は、次のような経過をたどっている。
昭和 22 年 5 月 1 日 創立認可 三井下 4 条 2 丁目 三井美唄小学校仮校舎に設置
昭和 23 年 4 月 1 日 三井上 7 条 7 丁目 仮校舎に移転（旧函館俘虜収容所本所）
昭和 24 年 9 月 新校舎第一期工事完成。8 教室。3 年生のみ移転。
同年 11 月 新校舎第二期工事完成。7 教室、事務室、職員室。
昭和 25 年 2 月 新校舎第三期工事完成。4 教室、宿直室、衛生室、校長室。
同年 5 月 市制施行により美唄市立三井美唄中学校と改称。
同年 12 月 新校舎第四期工事完成。9 教室、音楽室、屋内体育館。
昭和 26 年 3 月 9 日 新校舎竣工落成式
- 3 『足跡 三井美唄 35 年史』（1964 年発行）所収の当時の鉱業所長、西村健次郎の「三井美唄炭鉱思い出の記」より。
- 4 白戸仁康著「三井美唄炭鉱における第二次大戦末期の「函館俘虜収容所」」より。
- 5 『美唄市医師会史』（昭和 56 年発行）収録「回想の美唄収容所」171～174 頁。
- 6 PHP 研究所発行。1990 年 9 月号から 1991 年 3 月号まで 7 回連載。オズワルド・ワインド（Oswald Wynd）氏は、1913 年東京生まれ。父は宣教師。18 歳まで日本で暮らす。エジンバラ大学進学後、第 2 次世界大戦で英陸軍諜報部に任命され、東南アジアで従軍中、日本軍の捕虜となる。クアラルンプール、シンガポールを経て日本へ。収容所では日本語ができるため通訳に志願。函館、八雲、室蘭、函館、美唄の順で 3 年半の収容所生活を送った。取材時は、北海に面したスコットランド・クレールで暮らしていた。

参考文献

- 『北海道の捕虜収容所 もう一つの戦争責任』 白戸仁康著 北海道新聞社 2008 年
「埋もれた歴史 一函館捕虜収容所秘史一」 田畑智博 『地域史研究はこだて』第 8 号
1988 年
「三井美唄炭鉱における第二次大戦末期の「函館俘虜収容所」」 白戸仁康 『地域史研究は
こだて』第 11 号 1990 年

本稿で紹介する美唄市行政資料室の収蔵資料

- ・『美唄市医師会史』 美唄市医師会 昭和 56 年発行
- ・『拓恵』 進徳町開基 100 年記念事業実行委員会 平成 3 年発行
- ・創立 25 周年記念誌『さゆらぎ』 美唄市立三井美唄中学校 PTA 昭和 47 年発行
- ・『美唄市百年史』 平成 3 年発行